Architectural Institute of Japan

日本建築学会大会学術講演梗概集
（東　海）2003年9月

研究室内におけるソファの使われ方とその意味に関する研究
-大学研究室の研究　その2-

正会員　○真境名達哉*
同　上松　謙太**

ソファの使われ方　姿勢
ソファの意味　会話の入り易さ

1. はじめに

大学ではソファ*1を設えた研究室がしばしば見られる。執務空間であることを重視し、研究の効率を考慮するならば、研究室内のソファはこれらの効率を妨げているのかもしれない。なぜならソファに集まる学生は、研究をしているというより愉しげにおしゃべりをしているように見えるからである。

しかし、研究室は学生にとって大切なコミュニケーションの場であることも事実であろう。学生にとって研究室は、研究に関する議論の場だけでなく、就職や進学に関する情報交換の場、他学年との交流の場ともなりうるからである。このように考えると、研究室におけるソファの存在は必ずしも否定されるものではないだろう*2。本研究ではこれらを背景に、研究室内での会話が学生にとってどのような意義を持ち、ソファの使われ方がそれにどのように関わるのかを、明らかにしていきたい。

2. 調査方法

調査ではまずアンケートを用いて、研究室での会話の意義と、ソファの有無そして会話の賑やかさなどを見ていく。アンケート対象者は室蘭工業大学建築コースの過去10年間（平成4年～13年）の大学院卒業生120名で、大きく表1の3つの項目について尋ねている。

表1　調査項目

Ⅰ. 会話・研究室の意義
（研究室で行った会話の現在での捉え方、今後の研究室のあり方）
Ⅱ. 当時の研究室内の様子や印象
（人数、会話の様子、先輩や後輩との会話の頻度、ソファの有無）
Ⅲ. 当時行った会話の内容
（進学や就職、研究、悩みについてそれぞれ会話した頻度と、その会話の重要度）

次に、実際にソファがこれらの会話にどのように関わっているかを、室蘭工大内の研究室（KM研究室）を対象にビデオを用いて観察した。KM研究室の構成は院生7名、研究生1名、計8名で、部屋の中心にソファが配置されている（図1参照）。

3. 調査概要・結果

3-1. アンケート調査

残念ながらアンケート回収率は20%（配付120：回収25）と少なかったが、集計結果から大きく次のことが明らかになった。

Ⅰでは「過去を振り返って、研究室で行った会話は意義があった」、「今後も研究室を議論する場として提供すべき」との質問を行ったが、それぞれ87%（22人）、84%（21人）の卒業生が研究室の会話に対し肯定的な回答を述べていた。又Ⅱ、Ⅲの質問項目のクロス集計（表2～4）を見ると、ソファが設置されていた研究室の方が、会話が賑やかであったこと（表2）、「先輩や後輩との会話」（表3）、「進学や就職についての会話」（表4）もソファが設置されていた方が活発であったとことが窺えた。これらの結果から研究室内での会話は卒業生の立場からみて意義があること、またソファの存在が、それらの会話の活発さに何らか関係が窺われる。

表2　会話の様子（賑やかさ）

	ソファあり	ソファなし
賑やか	83%	43%
どちらとも言えない	17%	7%
静か	0%	50%

表3　先輩や後輩との会話

	ソファあり	ソファなし
多い	90%	21%
どちらとも言えない	9%	29%
少ない	0%	50%

表4　進学や就職についての会話

	ソファあり	ソファなし
話した	81%	57%
どちらとも言えない	9%	14%
あまり話していない	9%	28%

3-2. ビデオ観察

実際にソファがあることで、どのように会話が賑やかになるかをビデオを用いて見ていく。調査対象時間は予備調査*3で最も在席者数の多かった17：00～23：00の6時間とし、それを12月10日～12月26日の内の4日分撮影した。ビデオ調査では表5の項目に着目し、それぞれについて「ソファを使用した時の会話」と「ソファを使用していない時の会話」について観察した。

まず着目点のうち、時間や回数など数値化できるものを表6にまとめ、その観察結果を以下で述べる。

「会話の回数」、「会話の時間（合計）」から、研究室ではソファでの会話よりもソファを使用しない会話の方が多いことが分かる。しかし「会話の平均時間」、「会話の最長時間」を見ると、ソファでの会話の方が長い。また「会話に参加した人数」

表5　ビデオ観察での着目点

「会話の回数」
「会話の時間」（合計、平均、最長）
「会話に参加した人数」
「学年を越えた会話」
「会話に参加していない人の反応＊4」
「会話への入り方」
「声の大きさ」
「ソファを使用する人の姿勢」

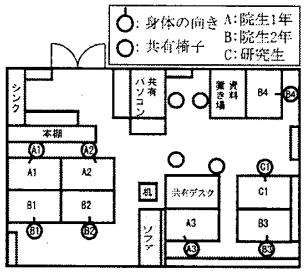


図1　ビデオ観察の対象研究室*5

A Study on Using of a Sofa and its Meaning in a Laboratory
-On a Laboratory of University part 2-

UEMATSU Kenta, MAJIKINA Tatsuya

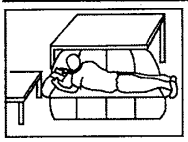
NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

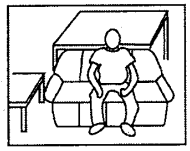
を見てもソファでの会話の方が多くなっており、ソファでの会話は研究室全体の会話量では少ないものの、一回毎の会話は長いことが分かる。

表6　ソファの使用と会話との関係

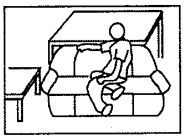
	第一回	第二回	第三回	第四回	平　均
会話の回数（合計）	33回	18回	13回	32回	24回
ソファを使用	2回	4回	2回	6回	3.5回
ソファ使用しない	31回	14回	11回	26回	20.3回
会話の時間（合計）	93分	53分	46分	57分	63分
ソファを使用	15分	26分	22分	17分	20分
ソファ使用しない	78分	27分	24分	40分	42分
会話の平均時間	2.8分	2.9分	2.1分	1.7分	2.4分
ソファを使用	7.5分	6.5分	2.2分	2.8分	4.8分
ソファ使用しない	2.5分	1.9分	2.1分	1.5分	2.0分
会話の最長時間	7分	26分	18分	40分	22分
ソファを使用	5分	26分	18分	40分	22分
ソファ使用しない	7分	7分	12分	11分	9分
会話の参加平均人数	2.3人	2.8人	2.4人	3.1人	2.8人
ソファを使用	2人	4.2人	2.5人	4.8人	3.4人
ソファ使用しない	2.5人	2.2人	2.4人	2.5人	2.4人
学年を越えた会話の合計回数	27回	6回	4回	16回	13.3回
ソファを使用	2回	1回	2回	5回	2.5回
ソファ使用しない	25回	5回	2回	11回	10.8回
平均在室者数	4.4人	3.5人	3.5人	4.6人	4.0人



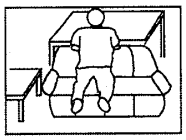
「寝転がる」
本やマンガを読む、あるいは本当に寝ている場合に見られた姿勢。この時の会話は参加人数が2～3人と少なく、会話がある場合、相手に顔だけを向けるなどしていた。



「座る」
ぼんやりしたり、本やマンガを読んでいるときに見られた姿勢。「寝転がる」も含め、この時の会話は活発ではない。



「膝をつく」「横を向いて座る」
会話が活発に行われた時に見られた姿勢。「座る」姿勢からこの姿勢に変える場面が見られた。「座る」の姿勢より体を話し相手に向けた姿勢。



「立ち膝」
同じく会話が活発に行われた時に見られた姿勢。この時、頻繁に体の向きを発話者に向け変えていた。

図2　ソファで見られた姿勢

その他の着目点については、ビデオ観察で特に興味深かった事例を挙げていく。

「会話の入り方」・・・ソファの使用が会話への入り易さを生み出している例が見られた。例えばソファに人が座っている場合、来室者の多くが部屋に入るとまずその人に声をかけていた。ソファの使用は来室者に対し、「会話可能」といったことを意味しているのかもしれない。

「ソファを使用する人の姿勢」・・・観察では大きく4つの姿勢が見られ（図2参照）、またこれらの姿勢が、会話の変化によって変わる様子も観察できた。例えば、ソファでの会話で、会話に参加していない人のあいづちやうなずきが増えると、「座る」から「立ち膝」に変化する場面も見られた。

以上をまとめると、ソファでの会話はデスク同士で行われる会話に比べ、それ程多くはないことから、ソファがあることで会話が生まれているわけではない。しかし、平均時間や最長時間を見ると、ソファでの会話の方で時間の長いことが窺える。また、ソファでの会話に参加する人数が多いことからも、ソファでの会話は発生する頻度は少ないが規模が大きいことが分かる。また、会話への入り易さ、話者の姿勢変更の容易さもソファの特徴として挙げられるだろう。

4. まとめと考察

背景にも述べたが、研究当初は学生同士の「ソファでの会話」が頻繁に行われることで、研究室内が賑やかになるものと予想していた。アンケートからも概ねそのような関連が見られたが、実際ビデオ観察からはソファでの会話がそれほど頻繁に行われていないことや、ソファでは人数が多く時間の長い会話、つまり規模の大きな会話が行われていることが明らかになった。会話の規模が大きくなる要因の一つとして、ビデオ観察の興味深い事例であげた、ソファの持つ会話への入り易さや話者の姿勢変更の容易さなどが関連していると思われる。以上を考慮するならば、ソファでの会話の数は少ないながらも、規模や密度の濃い会話であったためにそれが卒業生の印象に強く残ったのかもしれない。

今後は「（研究室での）研究の効率化」といった視点も加えながら、より総合的な視点で研究室におけるソファの意味を考える必要があるだろう。

注）

＊1　建築大辞典（第2版）には、ソファとは“2人以上座ることのできる休息用または団らん用の長い腰掛”とあり、本研究でもその定義を用いる。よって共用で使用する，1人掛け椅子などは対象としていない。

＊2　「学びの構造」で佐伯は、学生の学びについて“「より人間的に」していく人々の営みや文化の創造に参加していけるようにするため”と述べている。「人々の営」みとはより道徳的で、将来的に学生の糧となることを「学び」と記している。研究や勉強だけでなく、学生の進学や就職、悩みについての会話に着目するのはそのためである。

＊3　在室者が頻繁に研究室に滞在する時間についてアンケートをとった。特に夕食前後の18～19時、20～21時が多かった。

＊4　会話に参加していない人のあいづちやうなづき、振り向くなどの短時間な反応を示す。
反応について：「コミュニケーション学への招待」（参考文献）の中で、マタラッツォ（1964年）らは、うなずきやあいづちが会話の量を増幅する効果があると述べている。ここで本研究では「会話の賑やかさ」を見る一つの指標として用いた。

＊5　図面内の什器についてはソファ、ソファ付近の机、共有デスクを特にプロットし、網かけをしている。またその他の什器は個人専用の机、椅子、共有パソコン、物置き場、棚をプロットした。

＊本研究は藤本洋平君の卒業研究（平成14年度）を基に作成した。

＜参考文献＞
・橋元良明：コミュニケーション学への招待　大修館書店　1997年　100p
・佐伯　朕：「学びの構造」　東洋館出版社　1995年　167P

*室蘭工業大学建設システム工学科・講師
**室蘭工業大学建設システム工学科・大学院生

*Lecturer, Department of Civil Engineering and Architecture, Muroran Institute of Technology
**Graduate Student, Department of Civil Engineering and Architecture, Muroran Institute of Technology

NII-Electronic Library Service